

移動介護における福祉用具活用の有効性について

松本 京子¹, 藤原 美保², 飴屋 貴子³, 井上 圭一³

1) 社協ヘルパーセンター岩国 2) (有) 渡辺薬局在宅ケアサービス 3) 岩国市障害者サービスセンター

I. 研究目的

現在の介護を取り巻く環境として、2000年4月に介護保険が導入、そして、2006年4月には障害者自立支援法が導入され、介護は「してもらうもの」からサービスとして「利用するもの」へと移行し、サービス業として介護の質やサービスの向上に目が向けられている。しかし、1年間の全産業の平均離職率が15%であるのに対し、介護労働者の21%が退職するという就業実態調査が報告され、介護労働者の定着率の低さが危惧されている。¹⁾この定着率の低さには、社会的な地位や賃金の低さも一因として挙げられるが、身体的な負担が大きいという介護労働者の声も多く、介護労働者の筋骨格系障害罹患率は他職種と比較して非常に高い²⁾という研究発表がなされるなど、介護者の身体的負担の大きさも離職率に大きく影響していると考えられる。

そのような中、日常的に行われている介護の中で介護負担が大きく、頻度の高い介護の一つである移乗介護に今回着目した。というのも、近年移動に関わる福祉用具が年々開発されつつあるにも関わらず、介護現場では普及していると言えない背景には、セッティングに時間がかかるというこなし優先の考え方、抱えた方が良いという介護者の精神論的な思い込みが優先してしまい、まだまだ力任せの介護が日常的に行われている現状があるのではないだろうか。

しかし、私たちはトランスファーの研修を通じて今までの介護サービスを振り返る機会を持つことができ、福祉用具を利用することで介護負担を軽減できるという共通認識を持つことができた。

そこで、今回の研究では介護作業に関する客観的データを下分析し、福祉用具使用の有効性を検証したい。また、介護者の介護負担と、被介護者の介護負担について比較することによって「介護者にとって負担の少ない移動介護＝利用者にとって最適な介護」という図式が成り立つのかを検証し、介護者の負担軽減と利用者へのサービス向上につ

なげていくことを目的とする。

II. 研究方法

1. 対象

介護福祉士会岩柳ブロック・トランスファー研修会参加者21名と、岩国市内のデイサービスセンターの介護スタッフ16名の計37名を対象とし、回収数は36票(回収率97.3%)であった。

2. 調査方法

試行実験を踏まえた、集合法による自記式質問紙調査

3. 調査実施期間

2008年10月1日～2009年1月15日

4. 主な調査内容

質問内容については、対象者の体格・年齢・性別・介護の経験年数等の基本属性に加え、移動介護の実技課題を2例設け、福祉用具使用の有無や介護者、被介護者視点から痛みの発生部位等10項目について調査を実施すると共に、研修を通じた気づき等の自由記述欄を設けた。

5. 調査に際しての倫理的留意

調査実施に際しては、調査対象者への調査目的の説明を行い、協力の同意を得た。調査データの取り扱いに際しては、対象者のプライバシー保護に留意し、データ管理責任者を決め一元的に管理を行った。

6. データの分析方法

対象者の体格・年齢・性別・介護の経験年数等の基本属性、痛みの発生部位等については単純集計およびクロス集計で示した。また、自由記述については分野ごとにまとめて整理した。

III. 結果

上方移動時の福祉用具使用有無における痛みについて、介護者がスライディングシート未使用の場合、「何らかの痛みを感じた人」が94.4%に上っている（図1）。痛みを感じた部位別に見ると、腰86.1%、腕66.7%、肩8.3%、その他25%という結果となったが（図2）、スライディングシートを使用した際の痛みについては、11.1%であり（図1）、部位別では腰5.6%、その他5.6%となった（図2）。

被介護者では、スライディングシート未使用の場合、「何らかの痛みを感じた人」は75%（図1）、痛みを感じた部位別に見ると、首38.9%、腰33.3%、肩19.4%、腕5.6%、その他16.7%という結果になったが（図2）、スライディングシートを使用した際の痛みについては2.8%であり（図1）、痛みの発生箇所は肩のみであった（図2）。

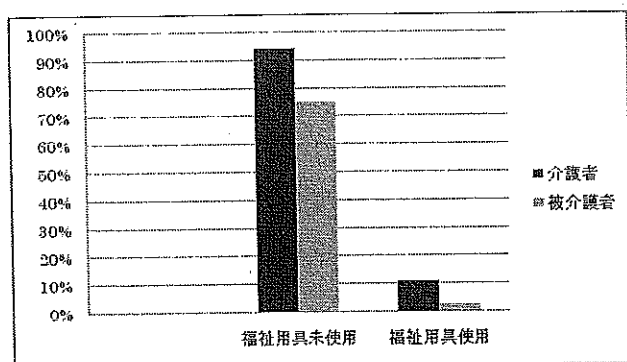


図1 上方移動時における福祉用具使用・未使用時の痛みを感じた人の割合について

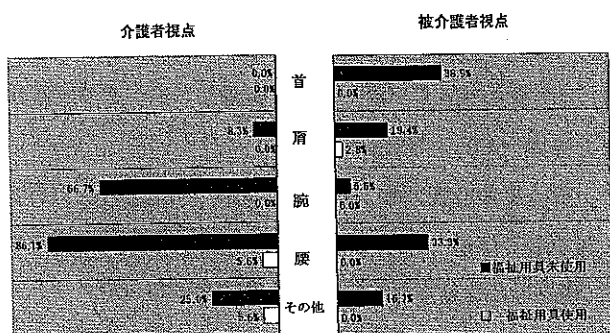


図2 上方移動時における福祉用具使用・未使用時の痛みを感じた人の割合について（部位別）

次に、ベッドから車いすへの移動について介護者が福祉用具未使用時に、「何らかの痛みを感じた人」が61.1%であり（図3）、部位別に見ると、腰52.8%、腕33.8%、肩13.9%、首5.6%、その他8.3%という結果となったが（図4）、トランスファーボードを使用した際の痛みにつ

いては8.3%であり（図3）、部位別では、腕5.6%、その他2.8%となっている（図4）。さらに、スライディングシートを併用した際の痛みについては、すべての介護者が痛みを感じなかったという結果であった（図3）。

被介護者では、福祉用具未使用時に、「何らかの痛みを感じた人」が47.2%で（図3）、部位別で見ると、腰44.4%、腕11.1%、首、肩がそれぞれ2.8%、その他5.6%という結果になった（図4）。トランスファーボードを使用した際の痛みについては2.8%で（図3）、部位別にみると、痛みの発生箇所は腰のみであった（図4）。さらに、スライディングシートを併用した際の痛みについては、すべての被介護者が全く痛みを感じなかったという結果であった（図3）。

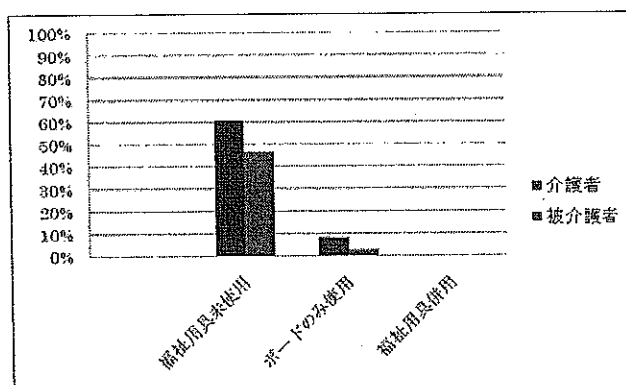


図3 車いすへの移動における福祉用具使用・未使用時の痛みを感じた人の割合について

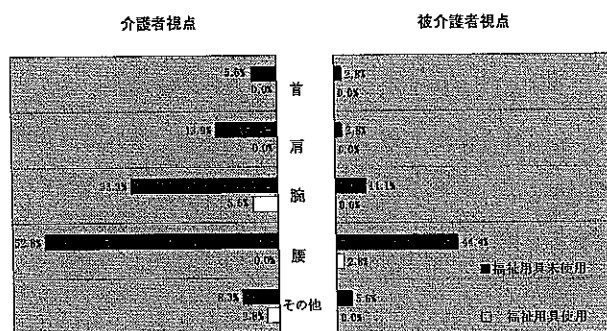


図4 車いすへの移動における福祉用具使用・未使用時の痛みを感じた人の割合について（部位別）

IV. 考察

今回の研修は、基本的介護技術の共通認識を深め、同一の作業環境で福祉用具を使用し実施した。性別や体格によって痛みの部位は多少異なったが、データが示しているように明らかに福祉用具活用の有効性が認められた。また、参加者の声として「福祉用具を使用すれば、介護者だけでなく、被介護者も安全で安心感があるということを確認で

きた。」という声が複数挙げられた。

しかし、一方でセッティングに時間がかかるため現場では活用が難しいという意見や、抱えた方が良いという声もある他、値段が高いために購入をためらう意見も見られるなど様々な心理面での負担感や不安感があることも明らかとなった。

そして、今回の研修の中で男性介護者が被介護者を上方移動させる際に、頭部をぶつけてしまう事故があり、福祉用具使用の危険性も指摘された。また、事故には至らなかったが、車椅子への移乗時に被介護者が滑りやすくなった為「転落させてしまう」、「転落する」という双方に恐怖感を感じる声が聞かれた。

このことから、福祉用具の活用によって「介護者にとって負担の少ない移動介護＝利用者にとって最適な介護」ということを立証するには至らなかったが、介護者が福祉用具を正しく活用できれば、事故のリスクも軽減でき、被介護者の心理面での不安は軽減できるのではないだろうか。

その為にも、日常の介護現場で福祉用具の有効性を共通認識し、ボディーメカニクスを取り入れた基本的介護技術に加え、福祉用具を取り入れた介護技術研修も随時開催し普及活動をしていくことが必要と思われる。

介護に従事する専門家同士が連携し、より安全で満足度の高い介護方法を現場で実践していけるよう志を新たにしていきたい。

V. 結論

介護者にとって負担の少ない移動介護＝利用者にとって最適な介護という図式が成り立つのかということについて、研究から介護者及び被介護者の双方の身体的負担の軽減は検証できた。しかし、福祉用具への理解が十分でない介護者、被介護者共に不安感が生ずることや、費用対効果に疑問が生じ購入に至らない可能性もあることがわかった。

今後、介護者・被介護者に最適な介護ツールとして福祉用具を活用していくためには双方の用具への理解を深めていく必要がある。

謝辞

本研究にご協力いただきました皆様に、心から御礼申し上げます。

引用・参考文献

- 1) 財団法人介護労働安定センター 平成 19 年度介護労働実態調査 2008
- 2) 富岡公子 「福祉用具の有効性に関する介護作業負担の比較研究」 『産業衛生学雑誌 2007』
- 3) 大田仁史 三好春樹：新しい介護 講談社
- 4) 西條富美代 「移乗介助方法の相違による介助者の身体的負担」 日本理学療法士協会
- 5) 梶平 司他 「病棟看護職における職業性腰痛の実態について」